幻影のマリア

南　晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻影のマリア

【Ｎコード】
Ｎ０５２６Ｏ

【作者名】
南　晶

【あらすじ】
無味乾燥な人生を送っていた期間工員のリョウの前に現れた、本能のままに生きる美女まりあ。
生きる意味さえ忘れていたリョウは、彼女の貪欲なまでの性の執着に魅せられ、引き込まれていく。
まりあという名前しか明かさない彼女の正体とは・・・？
かなり大人向けラブストーリー。

第1話（前書き）

かなり大人向けラブストーリーです。
楽しんでいただけたら幸いです。

第1話

夕方５：００のサイレンが組み立てラインに響き渡る。

ぼくは手に持っていた板金をストックに戻す。

サイレンが鳴ってからはノーギャラだ。

残業代なしのタダ働きで１台だって流したくない。

最近、受注が減っているのか生産数が減って残業も少なくなった。

明日は休みだし、今日はこれで終業だ。

油にまみれた作業着のまま、タイムカードを打ってぼくは駐車場に向かう。

ハイブリッドが持てはやされる最近には珍しい、古いタイプのスカイラインがぼくを待っている。

別に走り屋を気取った訳ではなく、走り屋の友人が下取りも取れないからと廃車にするところをもらったのものだ。

ぼくは寮と工場の往復さえできればそれで良かったのでありがたく譲り受けた。

ただエンジン音がでかいのには閉口している。

ギアを入れ、クラッチを踏み込み、続いてアクセルを踏む。
スカイラインはものすごい音を立てて工場を飛び出した。

何もない真っ暗な道路をひたすら走る。
林に覆われていて見えないが右手は海岸だ。
この海沿いの道の終わりに社員寮がある。
2階建ての四角いプレハブ校舎のような建物だ。
ぼくらみたいな期間工員の仮住まいなので、雨風さえ防げればいいのだけど。
工場との契約が切れたら仕事も失うし、ここからも出て行かなければならない。
仮住まいで充分だった。

寮の前の駐車場に車を入れる。
一番端の駐車スペースにパステルピンクの軽自動車が止まっているのが見えた。
ぼくは嫌な予感がして車から降りた。

その途端、バンと音がして軽自動車の運転席のドアが勢い良く開いた。

ヒラヒラした膝丈のスカートから、サンダルを履いたすらりとした足が車から出てくる。

勢いよく飛び出してきたのは一人の女性。

予感が的中してぼくは立ち尽くす。

「・・・・まりあさん？」

「また来ちゃった。リョウ君、元気だった？」

いつもの甘い声がして、まりあは長いウェーブの掛かった髪を振り乱し、ぼくの前に駆け寄った。

ぼくは苦笑した。

怖いほどきれいな人なのに、そのテンションの高さは子供みたいでギャップがかわいい。

真っ白な肌に柔らかいウェーブの掛かった髪がかかる。

大きな二重の目はいつも楽しいことを探しているみたいにくるくる動いている。

小柄な体系に似合わず、部分的に肉付きが良いし、ぼくでなくても男ならその気になってしまう。

要するにぼくには不釣合いのイケてる女性だ。

「今日は何をされるおつもりで？」

ぼくは腕を組んで車にもたれた。

まりあはニタっと美しい顔に似合わない笑い方をしてぼくに抱きつく。

「リョウ君に抱いて欲しくなったの。あと面白いもの持ってきたんだ。」

ぼくは苦笑いしたまま眉間に皺を寄せた。

この面白いものが、いつも曲者だ。

まりあは天使の微笑みを浮かべてぼくの首に巻きつく。

フルーティーなコロンの香りが広がった。

「とりあえず、部屋であたしを抱いて。」

お菓子食べよう、みたいなノリでまりあはいつも過激なことを口にする。

自分が男に対して何を言ってるのか、絶対に分かってない。

ぼくが相手だからなのかもしれないけど。

「了解。変なことは後からね。」

ぼくがまりあを抱き返すと、彼女はクスクスと笑った。

彼女の髪のフルーティーな香りが鼻をくすぐる。

部屋のドアを開けるなり、彼女はぼくに抱きつき、狭いワンルームの床に押し倒した。

ぼくの胸の上に馬乗りになって、油で汚れた作業着をどんどん脱がせていく。

フレアースカートがめくれて、長い足が顕わになるが、そんなこともお構いなしだ。

これをされた初めての時は、ぼくはびっくりして強姦される女性の気分だった。

だけどいつもこうなので、ぼくはもうされるがままになることにしている。

ランニングシャツも強引に剥ぎ取ると、彼女は裸になったぼくの上半身に所構わずキスをし始める。

噛み付くような激しいキスの痕が、ぼくの体中に赤い斑点になって散りばめられる。

誰かに見られたら恥ずかしいから体に痕つけないでくれと、以前お願いしたことがあったが、一向に聞いてくれない。

「リョウ君を自分のものにした征服感があるんだもん。」

いたずらした子供のようにテへっと舌を出してまりあは笑った。

その微笑みだけで、なんだか自分の体なんかどうでもいい物に思えてしまって、ぼくももう何も言わなくなった。

彼女がそうしたいなら、好きにしてもらって構わない。

どのみち、彼女の他に体を見られる相手なんかいなかった。

一通りキスを終えると、まりあは馬乗りになったままぼくの両手を広げて押さえつけた。

天使なのか悪魔なのか分からない、魅惑的な笑顔がぼくの顔に近づいてくる。

舌の先でぼくの首筋をそっと舐めた後、ゆっくりとぼくの唇を嘗め回す。

唾液でぼくの乾いた唇が濡れてくる。

彼女の舌はゆっくり口内に侵入し、ぼくの舌を絡める。
彼女を抱きしめたいのに、両腕を押さえつけられたままぼくは磔にされている。
見かけによらないすごい力で、彼女はぼくの欲求を束縛する。
ぼくは身動きが取れないまま、彼女のキスだけを無心に受け止める。
それだけでぼくの呼吸はもう乱れてくる。

その途端。

ガチャンと金属音がして左腕に冷たい輪が嵌められた。
まりあは素早く、右腕も掴むと同じ輪をガチャンと嵌めた。
「・・・・これ何？」
ぼくは動かなくなった両手を見た。
「手錠。通販で買ったの。」
まりあはにこにこ笑って答えた。
サプリメント買っちゃった、くらいの軽いノリだ。

「・・・これを買った？」

ぼくは呆れてまりあを見つめた。

ぼくの反応などお構いなしに、まりあは持ってきた大きめのバッグから新たなアイテムを取り出す。

ぼくにはそれが犬の首輪に見えた。

「・・・まさかぼくに着けないよね、それ。」

答えは分かっていたけど一応聞いてみる。

それが普通の人の反応だ。

「そのまさかです。今日はリョウ君を奴隷にしたいの。」

美しい笑顔のまま、まりあは想像通りに答えた。

第2話

まりあさんはとにかく変っている。

良い解釈で言えば、本能に抗わない人。

自由で素直な女性だ。

ただ、普通の人ならきっと引いてしまう欲望を、彼女は積極的に口にし、実行に移す。

貪欲なまでに欲望を満たそうとし、そしてそれを楽しんでいる。

恥とか、理性とか、体面だとか、欲望の前に立ちはだかる全ての邪魔なものを彼女は持ちあわせていない。

ＳＥＸに対しての貪欲な探究心は、ぼくが感心するくらいだ。

今風に言うと肉食系女子か。

ぼくはそんな彼女のエネルギーが羨ましかったし、征服されるのも嫌いではなかったので、遭うたびに目の当たりにする彼女の奇行をむしろ楽しんでいた。

なにしろ毎回、いろんなモノを持ってきて、いろんなことをさせられるのだから、飽きることがない。

それにぼくは草食系なる言葉が出てくるずっと前から、女性には絶対服従なのだ。

それは間違いなく、ぼくが姉が3人の末っ子に生まれたという家庭の事情によるものなんだけど。

手錠をかけられて両手を頭の後ろに組まされ、裸体に首輪を嵌められたマヌケな格好で、ぼくは壁に背を向け立たされた。

まりあは満足そうにぼくを見つめ、うんうんと頷いている。

その瞳はオモチャを眺める子供のようにキラキラしている。

「リョウ君、素敵よ。写真撮っていい？」

「・・・ダメ。」

ぼくはうんざりして答える。

この姿を写真に収めたい意味が分からない。

ブログでもやってんのか？

まりあはぼくの胸を両手でゆっくり撫で回してから、作業ズボンのベルトを外した。

ズボンをトランクスと一緒に少しづつ下げてく。

そのままぼくの下半身を抱きしめながら彼女はひざまずいた。

「・・・・・う・・あ・・・っ！」

柔らかい唇の感触にぼくは思わず声を漏らす。

「奴隷は声出しちゃダメ！！」

突然、まりあは立ち上がって、ぼくの首輪をぐいっと引っ張った。

首輪が喉に食い込んで一瞬息ができなくなる。

「ゲホッ！　イっ・・痛ってえ！」

むせ返りながら悲鳴を上げると彼女の怒った顔が目の前にあった。

「申し訳ありませんご主人様、でしょ？」

「ええ・・・？」

ぼくはもう笑いたくなったが、彼女は真剣だ。

こんな時の彼女を絶対に笑ってはいけない。

彼女は全身全霊をかけてこのロールプレイゲームに取り組んでいる。

ぼくは観念して茶番劇に付き合うことにした。

「申し訳ございません、ご主人様。」

「お仕置きよ。足を広げて仰向けになりなさい。」

まりあは恐ろしい口調で命令した。

細い形の良い眉毛を吊り上げ、大きな瞳を見開いている。

彼女が女王様気取りでそのセリフを言っても、その仕草は逆にかわいらしい。

それ故にぼくは彼女の命令に逆らえない。

「了解しました。ご主人様。」

ぼくはできるだけ悲壮な表情をして床に仰向けになった。

とにかく彼女は変ってる。

でも、きっとどんな人でも人に言えない願望を持っている。

それを彼女はちょっと正直に口に出して実行してしまうだけなんだ。

彼女の性に対する貪欲な姿勢は、ダラダラ惰性で生きてる自分には新鮮だった。

だからぼくは彼女がしたいことなら、どこまでもそれに付き合う。

それが自分が生きてる事を確認できることにもなっていた。

第3話

彼女との出会いは本当にひょんなことからだった。

半年前。

いつも通り、工場から車で出ると雨が降っていた。

水飛沫を上げていつもの海岸沿いの道路に車を走らせていると、前方に傘も差さずにトボトボ歩いている女性がいた。

悪気は全くなかったけれど、車が彼女の追い越す時に、物凄い水飛沫が彼女を直撃してしまった。

突然横殴りにかかってきた水の勢いで、彼女はよろけて濡れた道路に座り込んだ。

ぼくは慌ててハザードを出し車を路肩に寄せると、彼女の元に駆け寄った。

「ごめんなさい。大丈夫ですか？」

そう言ったぼくを、彼女はびしょ濡れになった顔で振り返った。

濡れたウェーブの髪が白い顔を縁取っている。

人魚ってきっとこんな感じかな。

濡れた彼女の瞳を見つめたままぼくはこんなことを思った。

「大丈夫です。ちょっとびっくりして転んじゃった。」

甘い声で彼女は言うと立ち上がった。

細い足に履いたパンプスが泥だらけだ。

下心無く、ぼくは言った。

「送ります。車乗って。」

彼女は嬉しそうに微笑んで頷くと、ぼくの後をひょこひょこついてきた。

困ったのはその後だ。

家はどこだと聞くぼくに、彼女は帰らないと言うのだ。

「あなたの家に連れてって。」

そう言った彼女の目は必死だった。

ぼくは困って頭をかいて髪をかきあげた。
今思えばこの時から彼女は変った人だった。
見抜けなかったのは、彼女の儚げな美しさに惑わされていたからに違いない。
「ぼくのうち、男子寮ですけど。」
「構わない。どこでもいいの。お願い、連れてって。」
彼女は大きな瞳を潤ませた。
大抵の男はこれには抗えないだろう。
ぼくももれることなく抗えない男だった。

部屋に入って、とりあえずズブ濡れの彼女をバスルームに誘導する。
「シャワー浴びてて下さい。タオル用意しますから。」
そう言ってバスルームのドアを閉めようとした、ぼくの手を彼女はいきなり掴んだ。
ひたむきにも見えるその大きな瞳でぼくを見つめている。

ぼくは期待で胸がどきどきした。

「・・・なんです？」

「・・・何でもないです。連れて来てくれてありがとう。」

彼女は笑っていうと手を離し、バスルームのドアを閉めた。

やがてシャワーの音が聞こえ出した。

ぼくは急に力が抜けてその場に座り込んだ。

やがて彼女がバスルームから戻ってきた。

ぼくの大きいシャツを着た彼女は子供みたいにかわいかった。

彼女はキッチンに立つぼくにゆっくり近づいてきた。

「寒くなかった？今、コーヒーでも入れますけど・・。」

突然、まだ喋っていたぼくにノーモーションで抱きつくと唇で言葉を遮った。

ぼくはびっくりして彼女を離す。

「な、なにするんですか！」

「あなたが好きになったの。」

彼女はにっこり笑った。

その微笑は天使みたいだけど、まさに悪魔の誘惑だった。

「・・・ねえ、抱いてよ。」

彼女はぼくの首に巻きつくと耳元に囁いた。

ぼくは何と言っていいか分からず、硬直して彼女のされるがままになっていた。

彼女はそれを承諾のサインと受け止め、ゆっくりぼくの作業着のボタンを外していった。

抱いてよ、と頼まれた筈だったけど実際はぼくは何もできず、彼女のしたいようにさせていた。

彼女はぼくの体を隅々まで貪り、敏感な部分を弄び、ぼくが悶えるのを見て満足そうに微笑んでいた。

一連のコトが終わると、やっとぼくは彼女に質問した。

「あなた、名前は？」

「まりあって呼んで。」

彼女はしれっと答える。

嘘だろと、突っ込みたかったがまあいい。

「あの・・・。こういうのがお仕事の方ですか？今の、お金取ったりします？」

「やだ、違うよ。あなたが好きだから抱かれたくなったの。」

彼女はケラケラ笑った。

「心配してたの？お金取るんじゃないかって？」

「・・・だって不自然でしょ。いきなりこんなの。」

彼女は仰向けに寝たままのぼくに体を寄せた。

豊かな張りのある胸がぼくの胸に押し付けられる。

「また会おうよ。あなた名前は？」

彼女はぼくにキスしながら甘い声で囁く。

「・・・リョウ。高崎・・・瞭。」

新たなる快感にぼくの呼吸が乱れてくる。

「リョウ君ね。あなたに会えて良かった。」

彼女の甘い声がだんだん遠くなっていった。

第４話

奴隷とご主人様ごっこはまだ続いていた。

ぼくは全裸に首輪で、両手を繋がれたまま、まりあの体を舌で愛撫する。

「犬のように舐めるのよ。」

まりあは高飛車に命令する。

「はいはい、ご主人様。」

ぼくは苦笑しながら、まりあの形の良いヒップにキスをする。

こんな姿、絶対誰にも見せられない。

でも、彼女の提案したプレイをするのは嫌いではなかった。

ＳＥＸって挿入する以外にこんなに楽しめるんだって変な発見の連続だった。

今回はぼくが奴隷だけど、以前やった「女教師を強姦ごっこ」は正直萌えた。

その日は、まりあはきちんと髪をアップにまとめ、銀のフレームの眼鏡に開襟シャツにタイトスカート、そして何故か黒の網タイツにパンプスで、颯爽とやってきた。

「高崎君、今日は勉強してもらうわよ。」

ワンルームのちゃぶ台に、ご丁寧に持参してきた英語の参考書を並べる。

「あの、ぼく理系なんで。」

卒業してから何年たったと思ってるんだ。

ぼくが言うと、まりあは胸のポケットからタクトを取り出し、ぼくの手に叩き付けた。

「いっ痛ってえ！」

悲鳴を上げるぼくを、眼鏡を指で上げながらまりあは冷笑した。

「こんなものもできなかったら、東大は無理よ。」

「いや、ぼく、頭悪いんで。」

その途端、2発目のタクトが振り下ろされた。

「痛いって！あ、あんたねえ！」

さすがのぼくもカっときて、タクトを握ったまりあの手を掴む。

それを待っていたかのように、まりあは悩ましい声で叫び出した。

「ああっ！や、やめてえ！いやあああ！！！」

あまりの声のデカさにぼくは焦って彼女に抱きつき、手で彼女の口を塞いだ。

「まりあさん、声でかいよ。ここ男子寮ですって。」

まりあは眉毛を吊り上げ、ぼくを睨む。

あ、この顔は怒ってる。

「リョウ君！騒ぐな、犯されてえのかこのアマ！って言ってよ。」

「は？」

言われてぼくは脱力した。

「ぼく、そういうキャラじゃないんですけど。」

「いいからやってみて！生意気な女教師を犯すのよ！」

まりあをこれ以上怒らせたくないので、ぼくは少し考えた後、できるだけ低い声を腹から出して言った。

「騒ぐんじゃねえぞ、このアマ。犯されてえのか？」

ぼく、本当にそういう人じゃないんだけど。

しかし、まりあは待っていましたとばかりに悩ましい声で応える。

「や、やめて。あたしにこんなことして許されると思ってるの？」

・・・この茶番劇は面白い。

ぼくは笑いを堪えながらも、何だかヤル気になってしまった。

「うるせえ！腐れアマが。オレがいいこと教えてやるよ。」

なるべくドスの効いた声でぼくは言うと、彼女の網タイツに爪を立てた。

タイツが破れ、真っ白な足が顕わになる。

茶番劇と分かってるのに興奮してくるんだから、男ってほんとにバカな生き物だ。

彼女を押し倒し馬乗りになると、開襟シャツを左右に開く。

ボタンが飛び散り、黒いブラをしたまりあの豊満なバストが弾け出た。

アップにしてあった髪が乱れ、床に広がる。

「ああっ！！やっやめてええ！」

まりあも本気モードで、目に涙を溜め必死に抵抗してくる。

なんで抵抗するのか意味が分かんないけど、ものすごい力なので、こっちも更なる力で押さえ込むしかない。

腹にまりあの蹴りが入り、ぼくがうずくまった隙に彼女はぼくの腕から脱出した。

「〜ってええ、こ・・のやろう・・・！！」

ぼくの中にあった僅かな男の本能がやっと目を覚ました。

ぼくは彼女を後ろから羽交い絞めにすると、美しいバストを鷲掴みにして爪を立てた。

タイトスカートをずり下げ、ヒップをまだ覆っていた網タイツを破る。

真っ白な彼女のヒップが現れた。

「お、お願い・・・やめて・・・。」

彼女は泣きながら懇願する。

ぼくは構わず、彼女を羽交い絞めにしたまま、そのままコトに及んだ。

ぼくが果てた後、彼女ははだけたシャツのまま擦り寄ってきた。

破れたタイツがまだ、僅かに白い足に巻き付いている。
乱れた髪が色っぽくて、見てるだけで更なる欲求を覚えた。
「良かったでしょ？野生に帰った？」
彼女はぼくの胸に顔をくっつけ、甘い声で聞いた。
「・・・・うん。」
認めざるを得ない。
良かった。
本能のまま行動する快感なのか。
自分が動物であり、男だったことを思い出した。
無味乾燥なぼくの生き方が何か変ったような気さえした。
「またしてくれる？」
ぼくはまりあの髪をなでながら聞いた。
「いいけど、次回は「満員電車で痴女にいじられるサラリーマンごっこ」だよ。盗撮用デジカメも用意したし・・・・。」
明日はカレーなのに、くらいのノリで彼女はブツブツと言った。
「ぼくを盗撮するの？」

「そう！楽しみでしょ？」

まりあは強姦されたままの姿で、天使の微笑みを浮かべた。

やぱりこの人は変っている。

だけど彼女と会っている時だけ、ぼくは自分が生きてることを思い出せるのだ。

第5話

夏が過ぎ、涼しくなって、いつのまにか11月になっていた。

ぼくは相変わらず、自動車工場の組み立てラインで板金加工をしている。

まりあは時々思いだしたように現れる。

ぼくは3交代で夜勤の時もあるのに、彼女がピンポイントで休みの前日の昼勤務の後にやってくるのは不思議だった。

だが、そもそもまりあという名前以外、ぼくは彼女について何も知らないのだから多少不可思議なことがあっても気にならなかった。

彼女がどういう人なのか知りたいような、知りたくないような気分だった。

この繰り返しの毎日に喝を入れるような彼女との激しい交わりだけが、ぼくが生きてる意味にになっていた。

相変わらずの毎日はまだまだ続くと思っていた。

「リョウ、聞いたか？」

仕事の休憩時間に、期間工員や派遣社員が集まる喫煙所で数少ない友人の正樹がぼくに声を掛けた。

ぼくと違って派手な感じのヤンキーっぽい茶髪で、今風で言うとチャラ男だ。

「何？」

ぼくは作業着の胸ポケットからタバコの箱を出して、正樹に勧める。勧めなければ、今ぼくがくわえてる吸いかけのタバコが奪われるからだ。

「お、サンキュ。」

正樹はニヤっと笑って一本取ると自分が持ってたライターで火をつけた。

「アメリカのサブプライムローンでバブルが弾けてから、輸出が減ってんだって。これからもっと生産が落ちるらしいぞ。」

「・・・・日本語で言ってくれよ。」

ぼくはテレビを見ないし、ネットもしないので世の中の情勢が全く分からない。

「だからさ、生産が減るの。人員削減あるかもしれないってことだよ。」

「・・・ああ、なるほどね。お前、見かけによらず頭いいな。」

正樹はぼくを横目で睨んで、タバコの煙を吹きかけた。

「急に切られたらオレ、かなりやべえよ。アパートも出なきゃなんないしな。新車買ったばっかりでまだローンもあるしさ。」

「また買ったのか？」

ぼくは呆れて正樹の顔を見た。

新車買うからと言って、改造スカイラインをくれたのはこいつだったからだ。

「スカイラインどうだ？走ってるか？」

「走ってるよ、通勤に。誰かがマフラーいじったからうるさいけど。でも、アレ乗っててていいことあったしな。」

そうだ。

あの車がまりあと引き合わせてくれた。

その時休憩の終わりのサイレンが鳴った。

ぼくらはタバコを消し、のろのろと現場に戻った。

正樹の言った通り、生産数は激減していた。

自分の仕事が終わってすることがなく、手持ちぶたさに掃除をさせられる時もあった。

こういう時は早く帰してくれればいいのだが、時間給のぼくらは稼ぎが減ってしまうのでそれも喜ばしくはない。

今日はこの一台を流してもう終わりだ。

ぼくはボタンを押し、ラインを流す。

そこに主任の岡田が現れた。

「高崎、今日はこれで終わりだな。」

男らしい低い声で、岡田はぼくに話し掛けた。

男性としては普通の体格のぼくより、一回り大きい。

日焼けした肌に精悍な顔立ちで、海上保安官とか、自衛隊員みたいだ。

男のぼくでもかっこいいと思う。

彼は同じ現場でぼくらと苦楽をともにしているが、正社員で主任という役職もあるので一線引いて付き合っていた。

彼はぼくの横に来た。

「お前、ここの現場長かったな。」

「入社してからずっとここですから。」

ぼくは作業する手を止めずに返事をする。

「オレが配属された時には、お前もういたからな。愛着あるだろう？」

「別に。仕事ですから。」

主任が何を期待したか分からないが、ぼくは板金に愛着など全く無い。

岡田主任は、笑みを浮かべて去っていった。

最後の一台が流れた後、また惰性の掃除タイムが始まり、定時のサイレンで終業になった。

明日は休みだ。

こんな日はまりあがやってくる可能性が高い。

新しいコーヒーとケーキでも買っておこうかな。

ぼくは少しウキウキした気分でタイムカードを打った。

外から見たぼくの部屋にはまだ明かりが灯ってなかった。
まりあはぼくの部屋の合鍵を持っているので、先に来たときは中に入っている筈だ。
「来ないのかな・・・。」
ぼくは少し失望して、ケーキとコーヒー豆の入ったレジ袋を掴むと車を降りた。
鍵を開けて暗い部屋に電気をつける。
油で汚れた作業着を脱いでシャツとジーパンに着替えた。
取り合えず、タバコに火をつける。
まりあの前では吸わないけど、ぼくは実はヘビースモーカーだ。
彼女が来ない休みの日は、タバコ吸う以外にぼくはすることがない。
こんなんじゃ、良くないよなあ。
まだ、２６歳にして何の希望もない人生。
正樹みたいに、財産かけれるほど好きなものがあるヤツは幸せだ。
ぼくはふと、思った。
まりあがぼくと一緒にいてくれたら・・・。

ぼくは変われるに違いない。

その時、ピンポーンと呼び鈴が鳴った。

ぼくはガバっと起き上がり、玄関に向かってダッシュする。

まりあが来た。

疑いもなくそう思い込んでいたぼくは、勢いよくドアを開けた。

「おまえ・・・。高崎・・・・・？」

外に立っていたのは、さっき職場で別れたばかりの岡田主任だった。

精悍な顔が驚愕の表情に変っている。

予想が外れて、がっかりしたぼくは若干投げやりに答えた。

「そうですけど。なんかありました？」

「お前がこのアパートに住んでいるのか？」

「・・・？　そうですけど？」

岡田主任は頭を抱えて座り込んだ。

「どうかしました？」

「お前のとこに女が来るだろ？」

ぼくは硬直した。

誰かが連れ込んでるってチクったか、彼女の声がうるさくて苦情がきたか。

「・・・誰から聞きました？」

おずおずと聞いたぼくに岡田主任は答えた。

「おれはあいつの夫だよ。」

第6話

ぼくは真っ白になった頭を必死で働かせて、やっと質問をした。

「岡田主任がまりあさんの旦那さん？彼女、結婚してたってことですか？」

「まりあじゃない。真理子だ。お前何にも知らなかったのか？」

ぼくは蒼白になって首を横に振った。

知らなかったとは言え、ぼくは岡田主任にとっては奥さんの不倫相手だ。

「少し、話せるか？」

そういって岡田主任は立ち上がった。

ぼくは頷いて、部屋にとおした。

断る権利は残されていなかった。

「いつから来てる？」

部屋に入るなり、また頭を抱えて座り込んだ主任は、ぼくに聞いた。

「１０ヶ月くらい前です。」

ぼくはコーヒーを出しながら正直に答えた。
殴られてもいい状況なのに、岡田主任は紳士的に質問を続ける。
「あいつがオレの嫁だって知ってたのか？」
「・・・知りませんでした。名前だって今初めて知りました。」
そうだ、もうまりあじゃない。
彼女の本名は岡田真理子。
「あいつに変なこと要求されただろ？」
そう聞かれて、ぼくは赤面して俯いた。
「・・・殴ってもいいですよ。知らなかったとは言え、ぼくは彼女と・・・・。」
「いい。言うな。あいつの男遍歴はすごいんだ。だから今更一人増えたところでオレは気にしない。
それも分かった上で結婚したんだからな。」
そういう考え方もあるのか。
ぼくは潔い主任の言葉に感心した。

「あいつは情緒不安定なんだ。少し狂ってる。でも、それはオレのせいなんだ。だから、オレはあいつのことも、お前のことも咎める権利はない。だけど、これからは会わないで欲しい。」

主任は男らしい顔を上げて真っ直ぐぼくを見た。

「・・・どうして狂ってるんですか？彼女は正直に生きてるだけだ。」

ぼくも負けずに睨み返した。

「真理子は昔から天真爛漫だったけど、変なことにのめり込むようになった理由があるんだ。」

「理由？」

「あいつは子供が産めない体なんだ。変なことをするようになったのは、それが診断された後から。
妊娠できないＳＥＸの虚しさを紛らわそうと必死で楽しもうとしてるんだ。」

ぼくは呆然とした。

天使のように笑うまりあしかぼくは知らなかったから。

主任は続けた。

「だけど、だんだんそれがエスカレートしてきた。変なコスチュームを持ってきたり、変な玩具を買ってきたり。真理子は子供ができ

ないコンプレックスからオレを必死で求めるようになった。オレはその時期、仕事が忙しくてそれどこじゃなくて。ある日工場までやって来てオレの帰りを待ってたあいつを、雨の中追い返しちまった。」

あ、それってもしかして・・・。

ぼくは傘も差さずにズブ濡れで車道を歩いていたまりあを思い出した。

「その日からパッタリとおれには何も求めなくなった。愛想を尽かされたのかな。だけど、この寮で女の声がうるさいって苦情が工場に入って、主任のオレが監視に行かされた。で、真理子の車が止まってたのを見てやっと分かった。」

突然、主任は黙って聞いていたぼくに頭を下げた。

「今回はオレが悪いんだ。だけど真理子とやり直したい。オレは真理子が何をしようと愛している。だから頼む。今までのことは忘れて身を引いてくれ。」

真摯な主任の態度にぼくは驚いた。

ぼくのほうが奥さんと不倫してたのに、それを許すどころか頭を下げるなんて。

どんだけ懐が深いんだ。

本当に無条件に愛してないと言えないよな、こんなこと。

自分の負けを確信したぼくは、答えるしかなかった。

「了解しました。主任。」

主任が帰った後、ぼくはまたタバコに火をつけた。

今まですぐにイメージできたまりあの笑顔が急にあやふやになった。

どんな顔だったのかよく思い出せない。

まりあなんて最初からいなかったんだ。

その僅か1週間後、ぼくたち期間工員と派遣社員の一斉解雇のリストが出て、アパートの退去命令が出された。

第7話

突然の解雇予告とアパート退去命令が出てからもぼくは相変わらずの生活を続けていた。

仕事はクリスマス前に終了、アパートは年末までに出なければならないと、人事部からの退社説明会で通達があった。

もとから、期間工なのでいつこういう事態になってもおかしくないのだけど、今回は社員以外全員クビという異常事態だ。

だが、突然言われても次の仕事の当てもないし、とにかくまだ実感が湧かない。

今ある業務を片付けていくしかなかった。

「言っただろ？こうなるって。」

ぼくのタバコに火をつけながら正樹が自慢げに言う。

これからクビになるっていうのに何威張ってんだか、と思ったがぼくは黙って苦笑いをした。

正樹の能天気さがぼくは好きだった。

「おまえ、どうすんの？借金あるんだろ？」

ぼくが痛い所を突っ込んでやると、正樹はがっくり肩を落とした。

「一旦、地元に帰るしかないだろ。オレ出稼ぎだからさ。仕事はないけど、田舎に帰れば家はあんのよ、とりあえず。」

「出稼ぎって、借金作ってたら稼いでないだろ？」

ぼくは苦笑した。

「うるせえよ。おまえはどうすんだよ。」

「ぼく？」

どうしようか。

いきなり目の前に真っ白なキャンバスがあって、何でも良いから描いてみろと言われたような気分だった。

「・・・わからない。何となく今、そういう気分になれなくてさ。」

それは正直な気持ちだった。

主任がぼくの部屋を訪れたのはまだ、最近のことなのだ。

もっともあの日からまりあはぱったりと姿を見せなくなったが。

「言ってる場合かよ。住居だけは早くなんとかしねえとやばくね？」

「実家はあるよ。姉ちゃん3人もいるし、何とかなるだろ。」

「実家どこだよ？」

「静岡。」

返事をしながらぼくは実家のことを思い出した。

海の近くの温暖な土地で、ここと変り映えにしないところだ。

「紹介しろよ。オレ年上ＯＫよ。」

正樹がニヤっと笑う。

「機会があればな。現場戻るぞ。」

ぼくはタバコを消して立ち上がった。

「ちらっと聞いたんだけど、オレ達の作業工程、そのまま中国工場に移転するらしいぞ。向こうで作ったほうが人件費かかんねえからな。それで、オレ達クビってひどいよな。岡田主任も向こうの工場に出向させられるらしい。」

ぼくはぎょっとして足を止めた。

「どのくらい？」

「さあ。日本が景気良くなるまでじゃね？」

岡田主任が中国に出向したら当然妻も連れて行くよな。

ぼくはぼんやり考えた。

最後にもう一度会いたい。

あの自由奔放なまりあに。

第8話

街がクリスマスモード一色になる頃、ぼくらの仕事は終了した。

これから年末までの2週間、有給休暇を消化してぼくは静岡の実家に帰ることにした。

片付ける荷物なんて殆どないし、遊び友達もいないので、年末までこの部屋にいる意味はない。

それでもぼくがギリギリまでここにいようと思ったのは、最後にまりあが会いに来てくれるかもという、一縷の希望を持っていたからだ。

今となっては、まりあが本当に存在したのかどうかも疑わしくなっていた。

岡田真理子さんという本名を知った時に、ぼくのまりあは消えてしまった。

そんな煮え切らない思いを持て余しながら、ぼくは何もないアパートで残された日々を過ごしていた。

もう会えないだろう。

ぼくがそう覚悟したアパートを引き払う最後の夜、まりあは突然現れた。

いつものようにピンポーンという呼び鈴が鳴った。

ぼくはその時すでに誰が外に立っているか分かっていた。

高鳴る胸を押さえてドアを開ける。

白いストールを巻きつけ、赤いコートを着たまりあがそこにいた。

冷たい外気で頬と鼻の頭がピンク色になっているが、いつもの美しいまりあだった。

クリスマスは終わったばかりだというのに、彼女はサンタクロースのような格好でにっこり笑った。

「入っていい？」

懐かしい甘い声が囁く。

「明日、引越しするんだ。入ってもお茶も出せないよ、真理子さん。」

すぐに抱きしめたかったが、ぼくは何とか理性でそれの感情を押し殺した。

人妻の岡田真理子さんをこれ以上、男の部屋に入れるわけにはいかない。

まりあの表情が曇った。

「騙すつもりはなかったの。ただ、あたしはリョウ君といるのが楽しかっただけ。」

「分かってます。そんなこと怒ってない。でも主任と、もうあなたに会わないって約束したから。」

まりあは沈黙した。

外は風が強くて立っているまりあの髪が乱れる。

冷たい外気が部屋の中まで入ってくるので、ぼくは彼女を部屋に入れた。

まりあは何にも無い部屋にちょこんと座り込んで、ポツリと言った。

「あの人が全部話しちゃったのね。」

「・・・・。」

ぼくはお湯を沸かしながら彼女が話すのを黙って聞いていた。

「リョウ君に会った時、あたし、さみしくて辛くてどうしようもなかったの。だからリョウ君の優しいとこにつけ込んじゃった。」

「・・・・。」

「あたし、子供ができないの。それが分かった時から主人の態度が変った気がして。子供ができなくても彼に悦んでもらおうと思って、

一生懸命にした事が全部裏目に出てたのね。」

「・・・・。」

「彼、あたしのこと許してくれたの。だからあたしも彼について中国にいくことにした。ここに来たのは一言リョウ君に謝りたくて・・・・。」

ぼくは腕を組んで、背の低いキッチンにもたれた。

彼女の謝罪を聞きながら、ぼくの目から涙が溢れてきた。

何の涙なのか自分でもよく分からない。

「・・・・何で謝るんだよ?」

ぼくは涙を拭いもせず、ようやくそれだけ言った。

「だって・・・。あたしあなたに黙ってた。結婚してることとか・・・。」

「悪いと思ってるなら、せめて謝るなよ。謝られたら、ぼくが騙されてたみたいだから。」

まりあは俯いた。

「そうね・・・。ごめんなさい。」

「・・・ぼくはまりあさんが好きだった。やりたいこと何でもやっちゃうまりあさんがね。エッチが好きなまりあさんも自由奔放で大

好きだった。だから子供ができなかったこととか言い訳にすんなよ。やりたかったから、しましたって言ってくれ。」

ぼくは少し感情的に言った。

自由なまりあの正体がタダの女性だったことが悲しかった。

いや、彼女があまりにも現実的で陳腐な謝罪をしたことで、ぼくの好きだったまりあが完全に消えてしまったのが許せなかったのだ。

「あたし、どうしたらいい？」

まりあも目に涙を溜めてぼくを見上げた。

どうするも何も、ぼくたちはもう終わってるんだから聞きたいのはこっちだ。

そんなことじゃない。

ぼくが欲しかったまりあは謝罪も後悔もしない、愛の女神だ。

「・・・じゃあ、一つ聞いていい？」

ぼくはまりあの傍に座って聞いた。

「・・・なに？」

まりあの濡れた睫毛がぱちぱち動いた。

ぼくは前から聞いてみたかったことを思い切って言った。

「ぼくと主任とどっちがいい？」

まりあは一瞬、意味が分からないというように首を傾げた。

「・・・どういう意味で？」

聞き返したまりあにぼくは少し笑って答えた。

「アッチの意味だよ。」

彼女は天使の微笑みを浮かべて、迷いなく言った。

「それはリョウ君よ。リョウ君としてる時、あたし違う人間になったみたいに楽しめたわ。」

違う人間。

多分、それがぼくの好きだったまりあだ。

それだけ聞けば十分だった。

ぼくは精一杯の笑顔を作って、右手を差し出した。

「これで報われたよ。あなたに会えてぼくも楽しかった。中国に行っても体に気をつけて、頑張って。」

まりあは泣き笑いしながら、ぼくの手をぎゅっと握り返した。

「あなたも元気で。」

北風の中、彼女はアパートを出て行った。

外で車のエンジンがかかる音がした。

ぼくはまたタバコに火をつけて寝転んだ。

ぼくの目から涙がまた溢れて、頬を伝い、畳の上に落ちた。

エピローグ

「それで瞭は変なクセがあるのね。」

亜由美はケタケタ笑った。

「笑うとこじゃないだろ。せつない青春の1ページの話したのに。大体、お前が昔の女の話しろって言うから言ったのに、その態度は何だよ。」

ぼくはタバコの煙を吐き出して、ふてくされて言った。

「だ、だってさ、正直、最初に縛ってくれって言われた時はドン引きだったよ。メイドになってくれの時はこの人もうダメだと思ったし・・・。」

亜由美はツボにはまったのかヒーヒーいって笑っている。

ぼくは横目で彼女を睨みつける。

「その変な男と結婚したのは誰だよ。てか、真昼間から子供の前で変な話すんな。」

昼下がりの臨海公園は、五月の爽やかな風が吹いて新緑が美しい。

3歳になる息子と、口の減らない妻、亜由美を連れてぼくはこの公園に散歩に来ていた。

息子が滑り台から手を振っているのが見えた。

ぼくは実家の静岡に戻った。

テレビを見ないので何も知らなかったが、ぼくらが解雇されたあの年、日本中の工場で派遣切りなる突然解雇が行われ、年末には派遣村なる失業者の仮住宅があちこちにできた。

ぼくのような工場で解雇された期間工員や派遣社員が日本中で失業者となって溢れていた。

思えば、まりあのことも含めて、あの寮にいた時のことはまるで夢のようだった。

すべてが仮のものだった。

一時的な仕事、仮住まいのプレハブアパート、そして気まぐれに出現したまりあ。

今の現実に比べると、全てが幻影だったような気さえする。

地元に帰ったぼくはしばらく失業保険で生活した後、こっちの自動車部品会社に就職した。

そこで経理部の社員だった亜由美と結婚し、今はささやかながらも地に足の着いた暮らしをしている。

まりあと会っていた情熱の時期は、ぼくの中では夢のように、忘れられないのに思い出しにくいものになっていった。

亜由美に会って付き合いだしてから、何度もぼくはあの夢を再現したくて、まりあが要求したことを彼女に求めた。

最初は確かにぎょっとしていたが、逢瀬を重ねることに亜由美はぼくの求めることを少しづつ受け入れてくれるようになった。

もちろん、再現するのは不可能だった。

亜由美はまりあのようなＳＥＸに対する貪欲さは持ち合わせていなかったし、ぼくもあの頃のような逃避行動的な性欲はもうなかった。

あの時の二人だったから、異常なまでに夢中になれたのだと思う。

でも、一生懸命ぼくに応えてくれようとしてくれる亜由美の優しさが嬉しくて、出会って１年後ぼくは彼女にプロポーズした。

まりあの行方はあれから全く分からない。

僅かに連絡を取っていた期間工の仲間は全員解雇された後、音信不通になってしまった。

ただ、経済新聞で岡田主任が担当していた中国事業所が撤退することになったのを知った。

日本に戻ってきているかもしれない。

だが、ぼくはもうまりあに会うことはないと分かっていた。

走ってきた息子を抱き上げ、ぼくは肩車してやる。

息子は喜んでキャキャっと笑い声を上げた。

ぼくらは新緑の中を家に向かってゆっくり歩き出した。

エピローグ（後書き）

お疲れ様でした。
最終章書いたところで作品のテーマが変ってしまったので、タイトル変更しました。
楽しんでいただけましたら幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0526o/

幻影のマリア

2010年10月9日02時52分発行